
想い

ノダメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い

【Nコード】

N5214F

【作者名】

ノダメ

【あらすじ】

高校生の里花は、いつもベランダにいた彼を見つけていました。その彼は、親友の好きな人でした。

第1話 悲しみ（前書き）

高校生の時に経験するような恋愛に挑戦してみました。

第1話 悲しみ

彼はいつも、学校の光のあたるベランダにいた。

授業の合間の休み時間をそこで仲間達とすごしていました。

私は、ただその彼を見つめていた。

（ただそれだけで幸せで何もいらぬ。ほんとに？）

そう自分に問いかけていた時。

「ねえ里花、相談があるんだけど。」

後の席にいる親友の恵が声をかけてきた。

その時、予鈴がなつてしまった。

こういう時は、授業中にいつもやる手紙のやり取りで話を聞く。

恵の相談は、好きな人ができたけど話かけられないという悩みだった。

そして、私は男子と話すのが苦手なのに。

「私が一緒にいって、仲とりもってあげるよ。」

親友の前だと見栄をはってしまう。

昼休みにその好きな人を見に行くことになった。

昼休みになり、ドキドキだった私の心は砕けそうになった。

恵の好きな人は、私の好きなベランダの彼だった。

第1話 悲しみ（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございました。

第2話 挑戦（前書き）

親友と同じ人を好きになってしまった里花。二人のなかをとりもつ約束までしてしまい・・・。

第2話 挑戦

下校時間に、恵をつれた私は、廊下にいた彼に思いきって声をかけた。

「岩澤くん、今度のお祭りにみんなで行くんだけど一緒に行かない？」

（バカバカ、何を言ってるの私。恵と二人で行くのになんたってだれよ。）

初対面で何が祭よ、普通行かないよ。）

「別にいいよ。」

「えっ？」

心の中で、頭を抱えていた私は、思わず彼の返事を聞き逃してしまった。

「だから、一緒に行ってもいいよ。祭か、お前も行く？」

彼の言葉に、跳びはねるような想いでいっぱい、祭に彼の友達も行く事も二人の中をとりもつことも忘れてしまいました。

そして、家に帰ってもその気持ちはおさまることはなく眠ってしまいました。

そしてその夜、彼と二人でお祭りに行く夢を見ました。

朝、今日は待ちに待ったお祭りの日。

夜に備えて、お昼から恵の家で浴衣の着付け、メイク、ああでもないこうでもないといろんな会話のシチュエーションを二人で考えました。

決戦の夜、お祭の近くにある川の橋で待ち合わせ。

私達はすこし遅れて橋に行くと、浴衣姿の彼と友達の鈴木君がいました。

「おお、浴衣可愛いね。

なあ、お前もそう思わない？」

鈴木君の問いかけに

「ああ」

彼は、私達に無関心でお祭りの提灯並びに目を奪われていました。

（ちょっとは、見てほしいな。）

そして、私は彼の隣に恵をいかせると鈴木君と二人の後につきました。

こうして、四人のお祭りが始まりました。

第2話 挑戦（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

第3話 一人

太鼓の音、陽気な音色をかなでる笛の音。

私には、聞こえなかった。前を歩く二人を見ているのがつらかったから。

周りの風景が灰色に見えた。私に二人を応援できるのかな？

無理なのに、なんで私は二人に笑顔を向けれるのかな？

その時、ドーンドーンと花火の音がした。

空を見上げると、花火が綺麗に夜空に咲いた。

悲しくはかない花火に見えた私の目に一粒の涙が流れた。

「感動しすぎ？」

鈴木君の言葉に我に返った。

「ちがうちがうなんか、目が痛くて。」

我ながら下手な嘘だけど、私の気持ちに気づかなければ、それでいい。

慣れない下駄にそろそろ限界になってきたし、早く帰りたい。

「花火終わったし、そろそろ解散しよう。」

鈴木君の言葉で解散になり、私たちはそれぞれの方向に別れた。

彼は、恵と同じ方向だから、今頃お祭りの思い出話に華が咲いているのかな。

そんなことばかり考えていると、自然に涙が流れその場に立ち止まっていた。

「そんなに痛いのか？」

彼が目の前にいた。

「なんでここにいるの？」

私の問いかけを聞かずに彼はかがんで背中をむけた。

「いいから、乗って。」

わけがわからない。

「いいよ。恥ずかしいし私、重いし、疲れちゃうよ。」

痛いけど、無理だよ。

「いいから、乗れ。」

私は、彼の背中に乗った。

「ありがとう。」

彼は、何も言いませんでした。

河川敷の淡い祭り提灯の光を浴びながら、私は、彼の背中に顔をうずめて泣いてしまった。

そして、家の前についても彼は何もいわずに帰っていった。

今日の出来事は、私の中の宝物で秘密。

それ以来、彼となにかあることもない。

例えば、私の恋はあの夏で止まった間々、時は過ぎてしまった。

高校卒業。 私は、彼にも親友の恵にも気持ち告げるとは、ありませんでした。

新しい生活、もう楽しい仲間に出まれた学校生活や彼のいるテラスに足を運ぶこともない。

高校の頃に想い描いていた大人は、もったかつこいい仕事をして東京で彼氏もいて、その次は結婚。 単純だ。

現実の私は、結局地元でバイト生活だ。

私のバイト暦は、高校の頃からだから、かなり長い。

だから平気でバイトの後輩に「恋をするのは、簡単だよ。 彼氏も簡単にできるよ。」なんて言えてしまう。

自分は、好きな人をひきずった間々でなおかつ彼氏なんて、できた事がこの19年で一度もないのだ。

でも、バイトの後輩たちは私に彼氏の相談を話してくる。

その答えを見つげるために、私は雑誌や女友達、先輩から聞いた話をあたかも自分におこったように話すのだ。

最低かもしれない、しかたない、これは、これで苦勞している。

いつも、感情の戦いだ。

気持ちが一杯になったその日、バイトでミスをたくさん起こしてあがった私に先輩がドライブに誘ってくれた。

深夜1時の湘南平、夜の海に月の光がさして、町の光がとても綺麗で自然と涙がこぼれた。

先輩が頭をなでてくれた。

「あんま、無理すんな。」

先輩とは、中学から一緒だけど話したこともなかった。バイトで再会してから、話すようになった。ただけなのに先輩には、いつもばれてしまう。

「大丈夫です。ありがとうございます。」

笑顔をむけた先輩が笑った。

「ああ、横にいるのがみかちゃんならよかったのにな。」

こういう人だ、みかちゃんはバイト先のかわいい高校生でしかも先輩には遠距離の彼女がいる。

だから、好きにはなっていけない人だ。

でも、私にとつての兄のようで安心できる人だ。

今日のこの月に、恋ができますようにと願った。

高校卒業してから、二年たって私は、二十歳になった。

そのころから、バイトの飲み会に積極的に参加しました。

バイトの飲み会は、おきまりコースだ。まず、飲み屋からはじまり、二軒目かもしくは、カラオケ、そ

のあとは、バイト先に帰り解散。

その日の、飲み会もおきまりコースで私は飲みすぎて、ふらふらだった。

カラオケの途中で一人外にぬけだして、バイト先に電話を掛けた。社員がいなか確認するためだった。

その時、何かが覆いかぶさった。唇に感触を感じた。

バイトのOBの先輩だった。何が起こったのかわからない、心の整理ができずに混乱していた。

何も、知らないバイト仲間たちがカラオケを終えて出てきた。だれも、きずいていない。

一気に酔いが醒めてしまった。(酔った勢いでされたんだから、忘れよう。)

何日間か、忘れようとしても頭に映像が常に流れていました。

やっと、忘れかけたところにその先輩がまた酔っ払いながら、店に来た。

来るの、しょうがない私の師匠である先輩と仲が良かったからだ。

私は、気まずかったので裏にある更衣室にユニホームを入れにいった。

ドアの向こうから、声がしてきた。

「ねえ俺、酔ってたけど忘れてないよ。」

その時、ドアがバンと開いて先輩に引き寄せられた私は、また唇を奪われていた。

その後、キスをするとはなかったが会つと、ときどきが止まらなかった。高校の頃の気持ちとは、

ちよつとちがう。私は、その気持ちが確かめるために思い切つて、

OBの先輩に「好きかも知れま

せん。」とそのままの気持ちを告白した。

「バイトの後輩と付き合う気ない。」

見事に失恋した。でも、心は傷ついていないむしろすっきりしていた。

ただ、キスをしてとききただけで好きという感情は、なかったようだ。

恋をするのに、いつからかあせていたのかもしれない。

そして、その日から飲み会の参加を減らした。

ゆっくりいい恋を探そう。

第3話 一人（後書き）

次回は、最終回です。お待たせしてすみません

最終回 想い

バイトの飲み会を減らしてから、私は学生時代の友達と飲むようになった。

思い出話に花が咲いていた、話題は高校の頃の恋話。

ただ、自分たちの恋話では、なく同級生のだれとだれが付き合っていたとか、そんな話を懐かしげ

に話す。でも、みんなの心の中は、その時の彼氏や好きな人を思い浮かべているのかもしれない。

私の心の中にも、彼がいる。（まだ、いる？）そう、心に問いかける。

「ねえ里花は、だれか好きな人いた？」

なんでも、知りたがりの亜美だ。

「うーん、いたけど秘密。」

何年もたった今でも、恵の前では、言えない。

恵は、高校の頃、私とちがって彼にちゃんと気持ちをぶつけていた。その恋は、実らなかったが、彼女は新しい恋を見つけて今度結婚する。

みんなと別れたあと、私は恵と二人でバーで飲み直した。

ジャズと薄暗い雰囲気のあるバーは、この雰囲気だけで酔えるような気がする。

「里花、好きな人って岩澤くんでしょ？」

私は、啞然とした。

「なんで、わかったの？」

恵は、心配そうに私を見つめていた。

「なんとなく。今でも引きずってるでしょ？」

私は、うなづくことしかできなかった。

付き合いの長い恵を鈍感だと思っていた。

鈍感な、私だ。

そして、その夜は、カクテルを飲んで酔いしれた。
恵と何かを約束した気がするけど、わからない。

この酔いに、この恥ずかしさを忘れない。
月に新しい恋を願ったあの日から、どれくらい経ったのだろう。
今日は、あの夏の日を思いだしながら祭りに行こうと思う。

昔と違う、とびきりの大人なっばいメイクに渋めの浴衣。一人で彼
におぶられたあの道を祭り会場の方へと歩いた。

卒業前まで、また会えないかと来るかもわからない彼を待つために、
この道に通っていた。

祭りの提灯の灯りがその時の気持ちを思いださせる。

（あの時、何時間も待っていた私はまだ彼を待ってるのかな？）

（待っていても、彼が来るはずないか。）

祭り会場についてから、屋台の見ながら周りのカップルや家族づれ
を見た。幸せそう。

とりあえず、友達がいたらできないことをやってみることにした。
ビールを片手にイカの丸焼きにかぶりつく。

大人になったら、やってみたかった。いつも、友達の前では着飾っ
てしまうからできなかった。

気持ちがいい、でも一人の祭りは寂しい。
祭会場をひと回りして、帰ることにした。

帰りの道も、あの道を通った。昔とちがって、一人歩く、でも一つ
だけ同じことが起こった。

やっぱり、下駄は履きなれない。

「痛い。」

私は、その場にしゃがみこんでしまった。

「大丈夫ですか？」

しゃがみこんでいた私に男の人が、足に絆創膏を張ってくれた。

「あつ。」

お互いにだれか、わかった。彼だった。

彼が私の前にしゃがんだ。

「ほら。」

昔と同じ彼は、やさしい。

「いいよ。恥ずかしい。」

気持ちが思い出させる、忘れたことがない。

「初めてじゃないだろ。いいから乗って。」

私は、彼の背中に乗った。

なんだか、おかしくなってきた。あんなに会いたかった彼がいる。

会いたいときに、会えなかったのに会えないと思った時に会えるなんて、変な奇跡。

心臓がときどきする、熱い。

大人になっても、緊張する。

言葉がでない。彼にあつたら、いいたいことはいっぱいあったのに。

「あのさ昔、俺、この道をさけて通ってた。友達におまえが待ってるて、冷やかされて。好きな子を待たせるって最低だよな。今も引きずってる。里花が今でも好きです。」

彼の言葉に、私は泣いた。

「私もずっと引きずってた。ずっと気持ち言えなくて、あなたに会いたかった。あなたが好きです。」

涙が止まらない。

「泣き虫。」

彼は、優しく笑顔で私の頭をなでてくれた。

二人で、卒業してから遠回り、今度は、二人でこの道を通りたい。待つのは、終わり。

終

最終回 想い（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございましたm——（m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5214f/>

想い

2010年10月31日14時18分発行